

## 十五夜の夜、僕達は

奄美市立朝日小学校 六年 原 二葉

うがみんしょうらん。僕はケンムンのポコ。僕の家族は三人。体が大きくて優しい父。明るく活発な母。そして僕。僕達はこの三人で食堂「奄福」を経営している。開店時間の五時に合わせてみんな準備をする。野菜や魚を切ったり、米をといで炊いたりしなくちゃいけない。意外と忙しいのだ。

(今日の一番目のお客さんはだれかなあ。)

僕の大好物のシビをさばきながらそんなことを考えていると、五時の鐘が鳴った。それと同時に、

「こんばんは。」

と一番目のお客さんが入って来た。それはアマミノクロウサギのヤマさんだった。ヤマさんは会社帰りにいつも奄福に寄ってくれる常連さんだ。

「すみません。」

ヤマさんの声を聞いた母がすぐにかけてくれる。

「えっと……。けいはんと島らつきようと、かしや餅を。」

「かしこまりました。」

と母は注文を紙に書いて厨房の冷蔵庫にはり、また別のお客さんの注文を聞きに行った。僕達はその注文用紙を

見て力を合わせて料理を作る。その時の父はとても頼もしくかつこい。こうして料理をしている間に、たくさんのお客さんがやってきた。ルリカケスやケナガネズミなど、たくさんの動物達で奄福は大賑わい。そして僕は大忙し。

「ポコ、この皿にトビンニヤのせて。」

「ポコ、油ぞうめんを作ってくれ。」

など、父にいろいろ頼まれるのだ。忙しいけど僕はそれがうれしい。だってお客さんがおいしそうに食べてくれるのを見るのが僕の楽しみだから。だから僕は奄福が大好き。

「ありがたさまりようた。」

最後のお客さんをお礼の言葉と共に見送ると、奄福は閉店。つかれて椅子に座っていると、母が冷たいミキを持ってきてくれた。ミキを飲みながら今日のことを考えていると、

「明日は八月十五日、十五夜よ。早く寝よう。」

と、母が言った。そうだ。明日は十五夜。この日、奄美の各地で農作物の豊作を祈願して豊年相撲を取る集落が多くある。ケンムンにとって十五夜は、一年で一番大きな行事。明日に備えて早く寝よう。お休みなさい。

翌日。みんなは、いつもより早く起き、豊年相撲に出

場するケンムン達や見に来てくれる動物達に配る、ふくらかんをたくさん作った。ふくらかんとは、蒸しパンのようなお菓子のこと。集落のみんなにも大好評のふくらかんを持って僕達は豊年相撲を応えんしに行くのだ。

「そろそろ出かけよう。相撲が始まるぞ。」

と父が言い、ふくらかんをかごの中に入れてみると、

「ごめんください。」

と僕の同級生のドン君が息を切らせて僕の家に飛び込んできた。あわてて理由を聞いてみると、

「大変なんだ。もうすぐ相撲が始まるんだけど、僕達の集落のリーダーがケガをして相撲に出場できなくなつたんだ。そこでお願いがあるんだけど、リーダーの代わりにポコのお父さんに出場してもらいたいんだ。」

急なことでびっくりしたけど、困っているドン君や集落のみんなを助けようと思った父は、相撲に出場することに決め、ドン君と公民館へと急いだ。僕も母も、ふくらかんを持って父達の後を追った。公民館では不安そうにしていた集落のみんなが、父の顔を見て、ぱっと笑顔になり、土俵に案内してくれた。土俵で待ちかまえていたのは体の大きなたりのリーダー、ブンゾウだった。「おとうさん、がんばれ。」僕は心の中でさげんだ。

「はっけよい、のこつた。」

取り組みが始まると周りから歓声が上がった。土俵の上の二人は、たおれないように足をふんばっている。その時、ブンゾウが父を持ち上げようとした。「危ない、お父さんが負けるかもしれない。」そう思った僕は力の限り大きな声で父を応えんした。

「お父さんがんばれ。負けるな。」

父は少しよろめいたが、しつかりとふんばり大きなかけ声と共にブンゾウをほうり投げた。

「ドッスン。」

ブンゾウは大きな音をたてて土俵の下でしりもちをついていた。集落のみんなは立ち上がり、手をたたいて喜んだ。ブンゾウも立ち上がり、父とあく手をかわした。森の長老が、

「今年も豊作間違いなしじゃ。みんな六調を踊ろう。」

と言い、三味線を弾き始めた。父は、

「農作物が豊作になれば、奄福がまた忙しくなるぞ。」  
と言いながら、僕の頭をなでてくれた。